

生活と疾病 学習指導案

日時:令和7年11月27日(木)6校時

対象: 年 名

場所:多目的スペース

授業者:

1 単元 診察法の種類

2 単元設定の理由

診察法とは、患者の病態を的確に把握し、適切な施術や治療方針を導き出すために行われる一連の医学的観察と情報収集の方法である。具体的には、医療面接をはじめ、視診、聴診、打診、触診などがあり、これらは互いに補完し合いながら、総合的な病態把握を行うために用いられる。こうした診察法を通じて治療方針を決定することが、より効果的な施術につながる。

「生活と疾病」は、「人体の構造と機能」、「疾病の成り立ちと予防」で学んだ基礎知識を土台として、疾患の病態を理解し、その知識をもとに適切に施術や支援につなげる力を養うことを目的とする科目である。その目標は、臨床医学やリハビリテーションに関する基礎的な知識を習得するとともに、疾病と日常生活とのかかわりを理解する能力と態度を育てることである。

「生活と疾病」の指導項目には、(1)診察法、(2)主な症状の診察法、(3)治療法、(4)臨床心理、(5)系統別疾患の概要、(6)リハビリテーションの一般、(7)主な疾患のリハビリテーション、(8)機能訓練の概要があり、本単元はそのうち「(1)診察法」の「イ 診察法の種類」に該当する。

本単元では、各種診察法の目的と基本的な方法を学び、得られた所見と疾患との関係を理解し、病態を的確に推測する力を養うことを目標としている。中でも医療面接は、単なる情報収集にとどまらず、身体的・心理的・社会的側面を含めた患者理解を目的とする重要な診察法である。視覚的観察が難しい視覚に障がいをもつ生徒にとっては、視覚情報に依存せず病態を把握できる手法として、特に有効である。

対象生徒は、これまでの半年間の臨床実習を通じて、基本的な質問項目を確認しながら、医療面接を行えるようになった。しかし、患者の反応や状況の変化に応じて質問を柔軟に展開する力が十分とは言えず、そのため患者から得られる情報が断片的・表層的なものにとどまり、患者の状態を十分に把握しきれていない場面が見られる。

こうした課題を踏まえ、本授業では、医療面接を通じて患者の状態を的確に把握する力を養うことを目的に、面接の質を高めるための振り返りに重点を置く。具体的には、生徒が自らの医療面接の音声を聞き返し、教員と共に質問内容や受け答えの流れを客観的に振り返ることで、自身の課題を明確にできるよう支援する。さらに、模擬患者の設定症例と自らの聴き取り内容との差異を分析し、それが自身の課題に起因していることを認識することで、具体的な改善策の立案へとつなげる。加えて、患者情報の聞き逃しが誤った判断につながり得ることを具体例で示し、情報を正確に把握する重要性を理解することもねらいとしている。

また、医療面接の学習には、さまざまな患者ケースでの反復的な実践が有効であることから、本単元では生成 AI を模擬患者として活用することを試みた。生成 AI を用いれば、多様な背景を持つ模擬患者像を即座に設定できるため、従来のように教員が模擬患者役を担う場合に比べて、より多くの学習機会を確保しやすいと考えたためである。加えて、生成 AI との対話ログを活用することで、教員はやり取りの記録をもとに、生徒の表現や質問の内容について具体的なフィードバックを行うことができる。

こうした工夫を通じて、視覚に障がいをもつ生徒が診察法を活用して病態を的確に把握する力を育成することを目指し、本単元を設定した。

3 生徒の実態

※斜体は ICT の使用を示す。

	視力等	学習状況・日常の行動傾向
A	右:0.1 左:0.07	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の携帯型デジタイズ録音再生機(ICT)を使用して授業を録音し、自己学習に活用している。 ・まとめの資料や課題は教員がデータ(UD ブラウザ)で26p、BIZUDP ゴシックで提供し、iPad で確認している。 ・墨字資料はA4、16p、BIZUDP ゴシックで提供し、拡大読書器で確認している。 ・羞明があるため、カーテンを閉め、直射日光があたらないようにし、適切な照度に調節した教室で学習している。 ・臨床実習の医療面接の際はセリフ形式のマニュアルを用いて、医療面接を行っている。 ・臨床実習の医療面接では、基本的な質問はできるようになってきたものの、患者の反応や状況に合わせて質問を広げられず、病態を十分に把握できていない場面が見られる。 ・あん摩マッサージ指圧師・はり師・きゅう師の国家試験合格を目指し積極的に学習に取り組んでいる。 ・学習時のエピソードと関連づけて知識を記憶することで、学習内容の理解と定着を深めている。

4 単元の目標

「知識及び技能」

診察法の種類(医療面接・視診・聴診・打診・触診)について、それぞれの目的と基本的な方法を理解することができる。

各診察法で確認される代表的な症状や所見を、対応する疾患と関連づけて理解することができる。

「思考力、判断力、表現力等」

診察法の目的や特性を踏まえて、患者の症状や訴えに応じた適切な診察法を選び、状況に応じて柔軟に活用するとともに、患者に対して分かりやすく丁寧に説明することができる。

各診察法で得られる所見から症状や疾患を推測する力を養い、あん摩師・はり師・きゅう師として必要な臨床的判断力を高めることができる。

「学びに向かう力、人間性等」

自身の診察行動について他者の視点も踏まえて振り返りながら、より良い診察の在り方を考え、継続的に学びに取り組もうとする。

5 単元の評価規準

「知識・技能」

診察法の種類(医療面接・視診・聴診・打診・触診)について、それぞれの目的と基本的な方法を理解することができる。

各診察法で確認される代表的な症状や所見を、対応する疾患と関連づけて理解することができる。

「思考・判断・表現」

診察法の目的や特性を踏まえて、患者の症状や訴えに応じた適切な診察法を選び、状況に応じて柔軟に活用するとともに、患者に対して分かりやすく丁寧に説明することができる。

各診察法で得られる所見から症状や疾患を推測する力を養い、あん摩師・はり師・きゅう師として必要な臨床的判断力を高めることができる。

「主体的に学習に取り組む態度」

自身の診察行動について他者の視点も踏まえて振り返りながら、より良い診察の在り方を考え、継続的に学びに取り組もうとしている。

6 指導計画

診察法の種類……計20時間

- ・医療面接の基礎(質問法・態度)……2時間
- ・模擬患者(生成 AI)での医療面接実習……2時間(本時は 1/2 時間目)
- ・模擬患者(教員)での医療面接実習 ……2時間
- ・視診……4時間
- ・打診……2時間
- ・聴診……4時間
- ・触診……4時間

7 本時の学習

(1) 本時の目標

- ・患者の応答に応じて質問を調整し、共感的な態度をもって医療面接を行うことができる。
- ・自身の医療面接を振り返り、質問の仕方・態度・情報の聞き逃しといった観点から課題を見つけることができる。
- ・医療面接において、患者情報の聞き逃しが病態把握の誤りにつながる可能性があることを知る。
- ・医療面接において、患者から得られる情報が、病態把握にどのように繋がるのかを理解する。
- ・医療面接における自身の改善点を具体的に説明できる。

(2) 展開

展開	学習活動	指導上の留意点	評価規準(観点)
導入 (13分)	1 学習の準備をする。 2 前時までの内容を整理し、本時の学習の目的を理解する。	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>携帯型デジタイズ器による授業録音の準備を見守る。</u> ・<u>前回までの配付資料は、教員が iPad で開いて提示し、生徒が確認できるようにする。</u> ・<u>前時までの学習内容の整理は、教員が資料の読み上げや重要箇所の口頭説明、確認箇所の拡大など視覚的配慮を行いながら進める。</u> ・本時の目標として、病態を的確に把握するためには、医療面接において患者の応答に応じて質問を工夫し信頼関係を築きながら必要な情報を引き出すこと、より良い医療面接のために医療面接後には内容を振り返って課題と改善点を見出すことが重要であることを伝える。 	
展開 (30分)	3 模擬患者(生成 AI)に対して医療面接を行い、聞き取った内容を整理し、教員に説明する。	<ul style="list-style-type: none"> ・事前、生成 AI に患者役(事例1)のプロンプトを与えておく。 ・iPad を用いて、後で振り返るための録音を開始する。 ・生成 AI の発言が想定 of 模擬患者の発言と大きく異なっていないか、教員が確認しながら進める。大きく異なっていた場合や、通信障害等により生成 AI が適切に動作しない場合には、教員が模擬患者の役を代行し、授業を続行する。 ・生徒が質問内容に困った場合は、教員が簡単なヒントやキーワードを伝え生徒の言葉を引き出す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・医療面接において、患者の応答に応じて質問を調整し、共感的な態度をもって医療面接を行うことができる。(知・思) ・患者から得た情報を整理し、説明できる。(知・思)

<p>4 教員と医療面接の録音を確認し、面接中の質問の仕方・態度面・患者情報の聞き逃しの有無について振り返りを行い課題を確認する。</p> <p>5 医療面接で得られた情報と、自身の質問や態度に関する課題をもとに、模擬患者(生成AI)に設定されていた症例内容を確認し、情報の不足が病態把握に与える影響について知る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・医療面接終了後は、生徒の医療面接を肯定的に受け止め、安心して発言しやすい雰囲気を作る。 ・生徒に医療面接で聞き取れた内容について質問し、確認する。 ・まずは質問の仕方、態度面、患者情報の聞き逃しの有無の観点について振り返りを行うことを伝え、先ほどの医療面接の録音音声を生徒と一緒に確認する。 ・医療面接時チェックリストは、教員が iPad で開いて提示し、生徒が確認できるようにする。 ・1～2分ごとに録音を一時停止し、その場面の良かった点・課題点を確認する。 ・教員は、医療面接時チェックリストを手元に持ち、生成AIとの対話ログの該当箇所を照合しながら生徒の振り返りを促す質問をする。 ・生徒が考える時間を十分に確保し、急かさずに待つ。 ・生徒の発言を肯定的に受け止め、安心して発言しやすい雰囲気を作る。 ・生徒が述べた考えを、教員が簡潔に言い換えるなど整理して共有し、全体像を把握しやすくする。 ・あらかじめ生成AIに模擬患者として設定していた症例を教員が iPad で開いて提示し、生徒が確認できるようにする。 ・模擬患者に設定されていた症例を教員が読み上げ、生徒の聞き取った内容と違いがないかを質問し、確認する。 ・生徒が「結局この人は〇〇だったのか。」「次回から、この問診項目を聞いておけば良いのか。」と設定していた症例の確認を単なる答え合わせで終わらせてしまわないよう、聞き逃した情報が誤解・誤判断につながる可能性があることを意識させる指導を行う。たとえば、発症時期や随伴症状の聞き逃しが、経過や重症度の判断ミスにつながり、施術判断を誤る可能性があることを示す。 ・生徒に、「もしこう尋ねていれば?」「この聞き方なら相手は答えやすかったか?」など、生徒が質問の工夫によって情報を引き出す視点をもてるように導く言葉かけを行う。 ・医療面接での自身が挙げた課題が情報の不足を生み、病態把握の誤りにつながっていたことに生徒自身が気づき、その課題認識の妥当性を自覚できるような言葉かけを行う。 ・生徒が発言に困った場合は、教員が簡単なヒン 	<ul style="list-style-type: none"> ・医療面接の録音と医療面接時チェックリストをもとに振り返りを行い、自身の医療面接の課題を確認できる。(知・思) ・自身の医療面接を振り返り、より良い医療面接を行うための課題を積極的に見つけようとする姿勢を持つことができている。(主) ・医療面接において、患者情報の聞き逃がしによってどのような病態把握の誤りが生じ得るのかについて、教員の質問に答えることができる。(知・思)
---	--	--

		<p>トを伝え生徒の言葉を引き出す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒が考える時間を十分に確保し、急かさずに待つ。 ・生徒の発言を肯定的に受け止め、安心して発言しやすい雰囲気を作る。 ・生徒が述べた考えを、教員が簡潔に言い換えるなど整理して共有し、全体像を把握しやすくする。 	
まとめ (7分)	6 本時の学習を振り返り、自分の言葉で説明する。	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が自分で気づいた点を言いやすいよう、肯定的に受け止める。 ・理解が不十分な部分や誤解があれば、情報を補いながら丁寧に修正する。 <p>生徒が説明する際に、必要であれば教員がキーワードを出す等の促しを行い、話しやすい流れを作る。</p> <p>生徒の気づきが「～ができなかった。」だけで終わらず、医療面接における病態把握を適切に行うため「次は〇〇を意識して質問を行う。」といった具体的で前向きな視点になるよう言葉かけを行う。</p> <p>最後に次回の授業では、今回の学習を踏まえて、違うケースの模擬患者に対して医療面接を行うことを予告する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習内容を自分の言葉で振り返り、医療面接における自身の改善点を具体的に説明できる。(知・思) ・より良い医療面接を行うために継続的に学びに取り組もうとしている。(主)

※斜体は ICT の使用を示す。

※模擬患者事例(腰椎椎間板ヘルニア)

患者設定

- ・ 氏名:山田 正人(仮名)
- ・ 年齢・性別:44 歳・男性
- ・ 主訴:腰が痛い

疾患名・診断情報

- ・ 診断名:腰椎椎間板ヘルニア
- ・ 診断時期・場所:約 1 か月前に整形外科で診断
- ・ 経過:発症後 1~2 週間は強い痛みがあったが、現在は軽快しつつある。医師からは 1~2 週間は保存的療法(薬・生活指導)で様子を見るように言われていた。強い痛みが無くなった現在、血行促進や筋緊張緩和を目的にあん摩施術を受けることは差し支えないと言われたため来院した。

現病歴(9 項目)

- ・ 部位:腰(主に右側)
- ・ 発症の日時:1 か月ほど前
- ・ 経過:当初よりは改善しているが、夕方になると痛む
- ・ 原因:仕事中に重い荷物を持ち上げたときに発症
- ・ 程度:現在は NRS 2~3/10(以前は 7~8)
- ・ 時間的経過:午前中は軽いが、長時間の立ち仕事や中腰で痛みが増す
- ・ 増悪・軽減因子:長時間立つと悪化、休憩後や温めた後に軽減
- ・ 治療の有無:整形外科で消炎鎮痛剤と湿布を処方された。服薬は今は中止している。
- ・ 随伴症状:右脚に軽度のしびれ感が残っているが、痛みはない。

生活歴・背景

- ・ 既往歴:特になし
- ・ 家族歴:父が高血圧
- ・ 嗜好品:喫煙なし、飲酒は週 2 回

- 仕事:運送会社の倉庫勤務(現在はデスク中心に勤務調整中)
- 睡眠:6時間程度、就寝中に痛みで目覚めることはない

性格傾向・会話態度

- 無口で自己表現が苦手
- 沈黙に対して耐性あり
- 表情や感情の起伏は乏しく、返答は淡々としている
- 質問されれば答えるが、主観的表現が少なく、詳細が曖昧なこともある

参考(用語解説)

腰椎椎間板ヘルニア:腰の背骨(腰椎)の間には、椎間板というクッションの役割をする組織がある。椎間板の中には髄核(ずいかく)という柔らかいゼリー状の部分があり、これが何らかの原因で外に飛び出して神経を圧迫する病気のこと。この神経の圧迫によって、腰の痛みや足のしびれなどの症状が出ることがある。

医療面接:患者の話聞いて、症状の経過や生活状況などを把握するための会話。

主訴:患者が一番つらい・気になると感じている症状のこと。

現病歴:今回の症状について「いつから」「どのように」「何が原因か」など、詳しい経過を聞き取ること。

随伴症状:ある病気や症状に付随して、一緒に出てくる他の症状のこと。

既往歴:これまでにかかった大きな病気やけがのこと。

家族歴:家族が持っている病気の情報。遺伝的な背景を知る手がかりになる。

嗜好品:食生活やたばこ、酒、などの習慣のこと。健康状態と深く関係するため確認する。

NRS:痛みの強さを0~10で表現する方法。0が痛みなし、10が耐えがたい痛み。

生活歴(生活背景):仕事、住環境、ストレス、睡眠など、日常の様子を把握する情報のこと。

教室配置図

